みんなで考えよう！川と私たちの未来

このままでいいの？球磨川の流域治水

私たちとその先の子どもや孫のために、いっしょに考えてみませんか

現在、国と県による球磨川の「流域治水」計画づくりが進んいます。しかし、本当に私たちの不安や希望に応える計画なのでしょうか。このパンフレットでは、現在進んでいる球磨川の「流域治水」計画づくりの問題について、わかりやすくお伝えします。

住民不在のままで進む治水対策

住民置きざりの治水計画づくり

現在、流域各地で「緑の流域治水」計画案の説明会が開催されていますが、参加した方々からは不満の声が噴出しています。行政側の説明は一方的で、地元の水の流れや山の状況を知っている住民の意見がまったく反映されていないためです。ダムありきの宅地嵩上げの高さ、ダムありきの引き堤や堤防、ダムありきの河床掘削など、完成めどの立たない流水型ダムを前提とした対策ばかりです。

流域治水計画づくりは、本来「すべての関係者と協議をしながら」実施することが定められています。リスクと向き合う私たち流域住民の声を反映させるよう、意見を出していきましょう。

水害の検証もなく再浮上 突然の川辺川ダム

従来の川辺川ダム建設予定地

2020年7月4日の豪雨災害後、国や県や自治体はなぜあれほどの水害が起こったのかについて一切検証することなく、いきなり川辺川ダム計画が再浮上しました。

あれほどの水と土石がどこから来たのか？亡くなられた尊い命は、ダムがあったら守られたのか？今回はあまり雨が降ってない川辺川に、球磨川中下流と同様の雨が降っていたら、緊急放流の危険性はなかったのか？

これらの洪水の検証なしで、ダム建設を検討することを許すべきではありません。

穴あきダムでは清流も守れない

島根県益田川ダム（流水型ダム）

国と県が進める「流水型ダム」（穴あきダム）で、本当に川辺川・球磨川の清流が守れるのでしょうか？

例えダムに穴が空いていても、アユは自由に遡上と下降できず、川辺川から「尺鮎」がいなくなると指摘されています。堆積土砂により川の濁りが長期化し、水質悪化と生態系の激変は、建設予定地だけでなく不知火海まで影響を与えます。しかし、国は法律に基づく環境アセスメントすら実施しない予定です。

すでに流水型ダムが完成した島根県益田川では、川や周辺の魚や水生生物、植生が激変しています。穴あきダムで清流も守れるとする根拠はどこにもありません。

7・4豪雨が新たな治水目標から外されている！？

球磨川の流れ

7・4豪雨災害を受け、国は新たな球磨川河川整備基本方針を策定しました。ところが驚くことに、2020年7月4日の雨量データは対象から除外されています。つまり新たな基本方針では、7・4豪雨災害に対処できないのです。

大きな被害を引き起こしたあの7・4災害を受けての治水目標見直しなのに、なぜこんなおかしなことが起きるのでしょうか。国は、ダムの必要性を正当化させるため意図的に外したのではないかとも指摘されています。気候変動で豪雨が激化するようになり、ダムを柱にした治水では対応できない時代になっています。

災害の発生源となった 流域の森林保全こそ急務

支流から土砂と倒木が流れ込んだ

昨年の水害では支流の被害が大きく、数百箇所の山が崩落し、山林の荒廃も被害拡大の原因と指摘されています。しかし国は山の問題を検証することなく、森林の専門家不在のままで流域治水計画づくりを進めています。

球磨川の流域面積の約80%は森林です。熊本県は「緑の流域治水」をうたう以上、現在の森林政策を根本から考えなおし、災害防止を視野に入れた流域の森林の再生、保全に力を入れるべきです。

発行：　美しい球磨川を守る市民の会 ／ 清流球磨川・川辺川を未来に手渡す流域郡市民の会
7・4 球磨川流域豪雨被災者・賛同者の会 ／ 坂本町被災者・支援者の会
子守唄の里・五木を育む清流川辺川を守る県民の会
連絡先：八代市萩原町 1-2-7 喫茶店ミック気付　TEL080-3999-9928（土森）

2021.11

みんなで考えよう！
川と私たちの未来

このままでいいの？ 球磨川の流域治水

現在進められている球磨川の「流域治水」の問題点について、わかりやすくお伝えします

川辺川ダムがあっても命は守れなかった

瀬戸石ダム下流のJR瀬戸石駅

7・4球磨川豪雨災害では、流域で50名の方が亡くなられました。

人吉市で亡くなられた20名の方々の時刻や状況について、住民と国会議員で調査した結果、そのほとんどは球磨川本流の氾濫ではなく、支川からの洪水や用排水路に流され亡くなっていたことが明らかになりました。亡くなった時刻や氾濫の状況から、ほとんどの方の命が川辺川ダムがあっても救えなかったと推定されます。下流では、瀬戸石ダムによる上流の水位上昇、下流の流速流量の増加が原因となり亡くなられたと思われる方もいらっしゃいました。

しかし、国は球磨川本流の治水対策しか検討せず、これらの検証を一切行っていません。まずはこれらの詳細な検証が必要です。

被災者に多い「ダムはいらない」の声

被災者の会と国会議員による被災調査

「７・４球磨川流域豪雨災害被災者・賛同者の会」が行ったアンケート調査によれば、水害対策として望むこととして「流水型ダムを作る」と回答した人はわずか8.1%。それに対し、「堆積土砂の撤去」「河道の掘削」は40%前後、「山林の保全」も40.7%でした。

気候変動により予測がつかない豪雨が降る時代になりました。ダムがあっても命は守れず、ダム頼みの治水が逆に命を危険にさらします。ダムを中心とした洪水対策には限界があるのです。

蒲島知事は「民意が変わった」として、13年前の川辺川ダム白紙撤回宣言から方針転換しましたが、アンケートで見る限り、被災者はダムを求めておらず、民意は変わっていません。民意が変わったとする根拠は不十分です。

水に浸かりながら聞いた「市房ダム緊急放流」の恐怖！

全国放送された緊急放流の知らせ

７月４日の朝、２階や屋根の上に多くの方々が避難している中に飛び込んできた「市房ダム緊急放流」の知らせを聞き、わたしたちは恐怖に震えました。

国や県は昨年豪雨での市房ダムの効果を大きく宣伝するだけで、緊急放流していた場合に想定される被害について、一切説明も検証もしていません。市房ダムは過去に３度も緊急放流をしており、線状降水帯による異常豪雨はこれからも続きます。川辺川上流で同様の雨が降り、もしも川辺川ダムができていたら、市房・川辺川ダムの同時緊急放流、数メートルの急激な水位上昇もありえます。

2018年西日本豪雨の際、愛媛県肱川（ひじかわ）ではダム緊急放流が原因の水害で９名が亡くなり、現在遺族らによる裁判が係争中です。緊急放流は命をも奪うのです。

ダム上下流の被害を拡大させた 瀬戸石ダムは撤去すべき

昨年豪雨時の瀬戸石ダムのようす

川のまんなかに大きな構造物があれば、流れを妨げます。瀬戸石ダムによって水面は常に高くなり、さらに大量の堆積土砂が水位を上げ、球磨村や芦北町では大雨の度に洪水が頻発していました。7・4豪雨災害以前から、国は瀬戸石ダム管理者である電源開発株式会社に対して土砂撤去命令を出していたほどです。7・4豪雨災害では、瀬戸石ダムのためにダム上流と下流の両方で甚大な被害が起きました。

瀬戸石ダムは治水に役立たないどころか、被害を拡大させます。一企業の利益のために流域住民が洪水の危険にさらされ続けています。瀬戸石ダムはただちに撤去すべきです。